

# 青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組

白木 賢信  
(筑波大学大学院)

## [要旨]

本論文の目的は、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を明らかにする研究の第1段階として、青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組を提出することである。そのために、青少年の組織キャンプで習得できると考えられる野外生活技術のこれまでの検討を手がかりに上述した分析枠組を作成し、事例によるその枠組の検討を行った。この分析枠組では、生活の領域別にみた青少年の野外教育での生活技術習得活動を野外教育プログラムから抽出することによって、そのプログラムではどのような生活の領域での生活技術習得活動にウエイトがかけられているかを明らかにすることになる。しかし、生活技術習得の特徴を解明するには、その生活技術の内容も明らかにしなければならないので、今後の課題として、生活技術を構成する要素やその要素間の関係についても検討する必要がある。

## I. 目的

本論文の目的は、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を明らかにする研究の第1段階として、青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組を提出することである。

わが国の青少年の野外教育研究では、野外教育に参加する青少年の意識的側面に関する効果他に、生活技術習得にかかわる効果が部分的に取り上げられている<sup>1)</sup>。生活技術習得は、例えば第15期中央教育審議会第一次答申でいわれているような「生きる力」<sup>2)</sup>を育成する上でも重要であろう。なぜならば、「生きる力」にはさまざまな側面があるが、生活をするための技術もその側面の1つとして挙げられ、生活技術を習得することは今後重要性を持つと考えられるからである。その場合、青少年の野外教育による生活技術習得にかかわる効果のみならず、生活技術習得活動が青少年の野外教育でどのように行われ、またどのような生活技術が習得されるのかといった、青少年の野外教育における生活技術習得の特徴が問題になると思われる。このような問題を解明するために、本研究では青少年の野外教育の1形態である組織キャンプ<sup>3)</sup>を取り上げ、そこで実施される野外教育プログラムでの生活技術習得活動の分析を行うことにするが、本論文ではそのための分析枠組を提出したいと思う<sup>4)</sup>。

## II. 研究方法

これまで、青少年の組織キャンプで習得できると考えられる野外生活技術についての

検討は行ってきたので<sup>5)</sup>、本論文ではそれを手がかりに上述した分析枠組を作成することにし、静岡県で実施された青少年の組織キャンプの参加観察と資料収集を行って、その枠組の検討を行うことにした。参加観察・資料収集の対象となった青少年の組織キャンプの概要は表1の通りである。また表2は、そのキャンプにおける具体的な活動の例である<sup>6)</sup>。

表1 参加観察・資料収集の対象となった青少年の組織キャンプの概要

名称	期間	参加者(人数)
'94年フロンティア・アドベンチャーキャンプ'	'94.7.31-8.10(10泊11日)	小学5年～中学1年(80人)
'95年フロンティア・アドベンチャーキャンプ'	'95.7.30-8.9(10泊11日)	小学5年～中学1年(79人)
Back to the Nature '95	'95.8.22-27(5泊6日)	小学5年～大学1年(92人)
'96年フロンティア・アドベンチャーキャンプ'	'96.7.28-8.7(10泊11日)	小学5年～中学1年(80人)
Back to the Nature '96	'96.8.20-25(5泊6日)	小学5年～高校3年(100人)

※場所はすべて、静岡県立朝霧野外活動センターキャンプ場およびその周辺である。

表2 「'95年フロンティア・アドベンチャーキャンプ」における活動

	午前	午後
1日目(7/30)	受付 入所式	開村式・オリエンテーション 設営
2日目(7/31)	冒険オリエンテーリング	
3日目(8/1)	班別自由お好み活動	
4日目(8/2)	班別自由お好み活動(続き)	休養 班別自由お好み活動(発表会)
5日目(8/3)	お好み活動	
6日目(8/4)	お好み活動(発表会)	
7日目(8/5)	休養	大沢崩れサバイバルハイク(準備)
8日目(8/6)	大沢崩れサバイバルハイク(野宿)	
9日目(8/7)	大沢崩れサバイバルハイク(続き)	
10日目(8/8)	村祭り(料理コンテスト)(お別れキャンプファイアー)	
11日目(8/9)	撤収 閉村式	退所式 解散

※場所：静岡県立朝霧野外活動センターキャンプ場およびその周辺、期間：'95.7.30-8.9

### Ⅲ. 研究結果と考察

技術にはさまざまな考え方があるが、本論文では、技術を一定の目的に達するための行動の仕方と捉えている<sup>7)</sup>。この考え方によれば、生活技術は生活目的に達するための行動の仕方であり、その生活目的を追求していくと、それは結局生存というところにたどりつくので、ここでは、生存のための生活に必要な機能的条件を明らかにして、生活技術をその機能的条件を遂行するための技術として捉えていくことにしたいと思う。

このような生活技術の考え方を手がかりにして作成した生活技術習得活動の分析枠組が表3である。表側にある生活の領域は、社会生活に必要な機能的条件という観点から捉えた領域で、青少年の野外教育の実態を考慮して作成した<sup>8)</sup>。この分析枠組によって、生活の領域別にみた青少年の野外教育での生活技術習得活動を、表頭で示されるいくつかの野外教育プログラムの中から抽出し、それらのプログラムではどのような生活の領

域での生活技術習得活動にウエイトがかけられているか、ということを明らかにすることになる。

表3 青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組  
—生活の領域別にみた野外教育プログラムでの生活技術習得活動—

生活の領域		野外教育プログラム	野外教育プログラム①	野外教育プログラム②	野外教育プログラム③
生物的機能維持の領域	衣食住に関する日常的な物質的満足				
	睡眠や排泄など生物学的動因の解決				
	健康の維持				
財・サービスの生産・分配の領域					
新成員の社会化の領域					
秩序の維持の領域					

※生活への意味付け・動機付けの領域は、表中の各領域の点線から下の部分に位置付けられる。

次に、この分析枠組を事例で説明することにしよう。表4は、生活の領域別にみた青少年の野外教育での生活技術習得活動について、すでに研究方法のところでも述べたが、静岡県で実施された青少年の組織キャンプの場合について検討した結果を提示したものである。この表によると、上述のキャンプでは、「生物的機能維持の領域」に最もウエイトがかけられている。さらにその領域について検討してみると、「衣食住に関する日常的な物質的満足」の食や住に関するところに重きが置かれていることがわかる。

しかしこの分析枠組は、青少年の野外教育における生活技術を習得しようとする活動がどのように行われているかを明らかにするものであるため、これだけでは青少年の野外教育における生活技術習得の特徴を十分に明らかにすることはできない。したがって、生活技術習得の特徴を明らかにするためには、その活動によって実際に習得された生活技術がどのようなものであるかを同時に明らかにしなければならないが、それには生活技術の内容について検討していく必要があると思われる。生活技術の内容を問題にするということは生活における技術の意味を問うことになろうが、特にその技術を構成する要素が問題になってくるように思われる。技術を構成する要素は、(a)道具・部品、(b)知識、(c)テクニック・技能・ノウハウ・方法の3つで、技術はこの3つの要素の組合せから成り立っている<sup>9)</sup>。ここでは、表4でウエイトがかけられている領域から、炊事をするための技術の1つである火の付け方を例にとり、その要素を具体的に検討してみることになろう。

まず(a)道具・部品については、一般に火を付ける場合には燃えやすい道具・部品が必要となる。事例ではマッチ、薪(木っ端)、新聞紙の他、キャンプ場内の枯れ木や落

表4 生活の領域別にみた野外教育プログラムでの生活技術習得活動  
— 静岡県で実施された青少年の組織キャンプの場合 —

野外教育プログラム 生活の領域	全体プログラム					選択プログラム		
	設置 (オリエンテーションも含む)	食事	冒険オリエンティング※※※	大沢崩れサバイバルハイイク (準備も含む)	村祭り	撤収	班別自由お好み活動	お好み活動
生物的機能維持の領域	・テントを張る (テントの組み立て方、テント周りの整地)	・炊事をする (かまどの使用法、調理法、炊き付け方、料理法、使用法)		・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・「料理コンテスト」を用いた炊事を行う (メまど、使用法、料理法、炊き付け方、火の消し方)	・テラクター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・防臭具などに着る (衣服の組合せ方)、各 (様々な活動に合わせた衣服の着用)
睡眠や排泄などの生物学的領域	・トイレの使い方の説明を受ける			・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・「料理コンテスト」を用いた炊事を行う (メまど、使用法、料理法、炊き付け方、火の消し方)	・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	
健康の維持	・ゴミの処理の仕方 (ゴミの焼却法) の説明を受ける (生ゴミの処理)	・栄養のバランスを考慮して食する (食品の洗い方、乾燥法) の説明を受ける (生ゴミの処理)		・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・「料理コンテスト」を用いた炊事を行う (メまど、使用法、料理法、炊き付け方、火の消し方)	・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・シェルター作りなどのビバークサイエントの整地、結果法、着る (衣服の選択方法、衣服の組合せ方)。	・害虫の予防の仕方 (害虫の発生原因、説明を受ける)

財・サービスの生産・分配の領域	法)	(ゴミの分別法、ゴミの焼却法)	ミの焼却法)					
<ul style="list-style-type: none"> <li>かまど・テーパー・いすなどを作る(ロープ結束法、杭の打ち方、かけやの使用法)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>体温調節のためのアイア(キャンプ用)の火を付ける(火の付け方、火の消調節の仕方、火の消し方)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>魚を捕獲する(釣り方の方法)</li> <li>食用の野草を採集する(野草の採集方法、野草の採集方法)</li> <li>活動記録を作成してその内容を発表する方法や発表方法)</li> </ul>
新成員の社会化の領域※※	<ul style="list-style-type: none"> <li>キャンプ場での説明や連絡の仕方、説明を受ける</li> <li>キャンプ場の紹介を受ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>出された課題をグループで協力して解決する(話し合いのため、課題解決のための役割分担の仕方)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>
秩序の維持の領域	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>作業の役割分担をする</li> </ul>

※生活への意味付け・動機付けの領域は、表中の各領域の点線から下の部分に位置付けられる。

※※表では示されていないが、新成員の社会化の領域にかかわる活動の1つとして、異集団への同化が青少年の野外教育全体を通じて行われていると考える。

※※※「冒険オリエンテーション」では、A. S. E. (Action Socialization Experience: 社会性を育成する実体験) が実施されたが、これは1つの小グループが1人では解決できない精神的・身体的課題に対し、メンバー一人ひとりの諸能力を出し合い、協力しながらその課題を解決する活動である(井村仁「イニシアティブゲーム」(日本野外教育研究会編『キャンプテキスト』杏林書院, 1989年, pp. 138-147)などを参照)。

ち葉などが石で作ったかまどで使用されたが、マッチや薪、新聞紙は指導者側から特に制限なく支給されたことから、火を付けるために必要なものとしての(a)を参加者自ら作り出したり、獲得したりすることはなかったといえる。

次に(b)知識では、火を付ける技術の場合、①(a)が乾燥されていなければならないという知識、②(a)は無造作に組まれているだけでなく空気が入りやすいように組まれる必要があるという知識、③何のために火を付けるのか(ここでは炊事用)という目的に関する知識が挙げられる。事例では、①や②の習得は目指されていたが、③については、「食事」などの野外教育プログラムは指導者側から提示されるものであり、火の付け方にかかわる目的を参加者側は自覚していなかったことから、習得の対象にはならなかったと考えられる。

さらに(c)テクニック・技能・ノウハウ・方法としては、(a)を使って火を付けるためのいろいろな方法やテクニックなどが挙げられる。事例のキャンプでは、摩擦熱などを生じさせることによって発火点を得るというテクニックの獲得は目指されなかったが、新聞紙をどのように小さくすると火が付きやすくなるかや、薪をどのように割ると良いか、あるいは(b)でいう空気が入りやすくするには(a)をどのように組めば良いかといったこと、マッチの擦り方、組んだ薪や新聞紙などへの点火の仕方、空気の入れ方などの習得が課題とされていた。また、上述のテクニックなどをどのような順番で使っていくかといった手順も挙げられる。

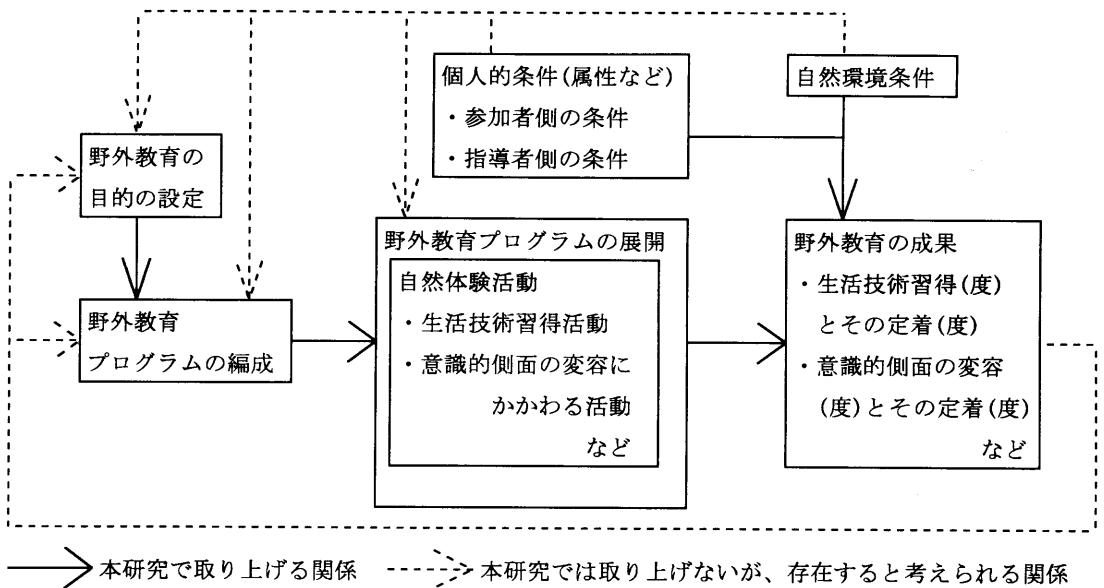
火の付け方はこのようにごく簡単なことになるが、他の技術についても同様の検討を行えばさまざまな特徴が明らかになるのではないと思われる。また、このような技術を構成する3つの要素は独立して存在するのではなく組合せとして存在しているので、生活技術習得の特徴を明らかにするためには、要素間の関係を検討する必要もあると考えられる。加えて、このような技術には階層性があることも考慮しなければならないであろう。例えば野外教育プログラムとしての「食事」で実施される炊事では、かまどで火を付ける技術、飯ごうなどを使ってご飯を炊く技術、なたや包丁などを使う技術などいくつかの技術が存在するわけであるが、これらすべてをまとめて1つの炊事の技術と捉えることも可能なのである。これらについての検討を加えることも今後の課題である。

## 注

- 1) 野外教育に参加する青少年の意識的側面に関する効果については、これまでに自己概念や自然認識の変容などの点で検討されてきている(井村仁「アドベンチャー・プログラム経験が中高生の自己概念と不安に及ぼす影響」(『筑波大学体育科学系紀要』5, pp.59-70, 1982)、橘直隆・小島哲・寄金義紀・飯田稔・吉田章・井村仁「フロンティア・アドベンチャー経験が小中学生の自己概念と自然認識に及ぼす影響—静岡県主催事業を事例として—」(『筑波大学運動学研究』7, pp.61-68, 1991)などを参照)。また生活技術習得にかかわる効果については、キャンプクラフトを中心とした野外生活技術の習得が検討されている(馬場進一郎・小泉紀雄・川畑智子・高田良平「キャンプ実習における学習内容の相違が実習生の野外生活技術の修得に及ぼす影響についての一考察—昭和62年度日本体育大学キャンプ実習を事例として—」(『日本体育大学紀要』17-2, pp.143-153, 1988))。

- 2) 第 15 期中央教育審議会第一次答申『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について』1996, 第 1 部, (3)。
- 3) 組織キャンプは、さまざまな形態を持つキャンプの中でも、社会的に責任のある組織・団体が、何らかの教育的な目的を掲げ、その目的の効果的な達成のために、計画から実施までのプロセスでのキャンプの組織責任や指導体制を明確にし、参加者の条件などに即した野外教育プログラムを展開していくキャンプのことをいう（石田裕一朗「組織キャンプの機構とその機能」（石田裕一朗・斎藤保夫編『現代野外教育概論』海声社, 1986, pp.38-47) p.39)。
- 4) 青少年の野外教育について付図 1 のような分析枠組を考えると、本論文で提出しようとする青少年の野外教育における生活技術習得活動の分析枠組は、図中の「野外教育プログラムの展開」の「自然体験活動」の 1 つである「生活技術習得活動」を分析の対象とするものである。

付図 1 青少年の野外教育における分析枠組



- 5) 拙稿「青少年の野外教育における生活技術習得研究序説」『筑波大学教育学研究集録』21, pp.79-88, 1997。
- 6) 「'95 年フロンティア・アドベンチャーキャンプ」での活動について簡単に述べておくと、参加者は 9 人または 10 人からなる男女・学年混合の 8 班で編成されており、1 日目から 4 日目までは、「冒険オリエンテーリング」や「班別自由お好み活動」など、班のメンバーが一緒になって取り組む活動が中心に行われ、5 日目と 6 日目の 2 日間は、各指導者が提供する 14 種類の活動のうちから、参加者自身が好きな活動を選んで、それを 1 日中行うという個人選択プログラム「お好み活動」が実施された。7 日目からは「大沢崩れサバイバルハイク」などの班別の活動が再び進められた。8 日目、9 日目に行われた「大沢崩れサバイバルハイク」は、このキャンプのメインプログラムとして行われた富士山大沢までの 1 泊 2 日の遠征のことで、その行程は往復約 28 キ

ロメートル、標高差が約 700 メートルのものである。夜はシートと寝袋を使用した班単位ないしは単独での野宿が実施された。

- 7) 馬場敬治『技術と社会 (第 1 卷) (馬場敬治著作選集Ⅶ)』(酒井書店・育英堂, 1970 (初版 1936)) p.7。なお、行動の仕方は計画的な手続きである (同, p.8)。
- 8) 具体的な生活の領域は、①生物的機能維持の領域 (生物的 biologic 機能を維持するために必要なもので、衣食住に関する日常的な物質的満足、睡眠や排泄など生物的な動因の解決、健康の維持など)、②財・サービスの生産・分配の領域 (広い意味で経済的 economic と呼ばれるような、生存に最低限必要な衣食住以上の物質的財やサービスに結び付く活動など)、③成員の再生産の領域 (成員の補充に関するもので、出産、移住、養子縁組など)、④新成員の社会化の領域 (子どもに対する価値観・知識・技術の提供に関するもので、教育、養育など)、⑤秩序の維持の領域 (秩序を維持するための統制・調整に関するもので、法律、政治などの領域での活動)、⑥生活への意味付け・動機付けの領域 (上述の①～⑤の領域すべてに存在しており、それらの領域での活動をうまく進め、その状態を維持するもので、娯楽、教養、趣味、祭への参加など) の 6 領域である (Bennett, John W. & Tumin, Melvin M., *Social Life: Structure and Function*. New York. Alfred A. Knopf. 1949, pp.45-59 参照)。ここでは、この 6 領域を並列的に用いるのではなく、他のいずれかの領域に存在する⑥生活への意味付け・動機付けの領域にかかわる活動については、表中の各領域の点線より下に位置付けておくことにした。さらに、青少年の野外教育では③成員の再生産の領域にかかわる活動は考えられないためこの領域を削除した。
- 9) 小泉賢吉郎『科学・技術論講義—社会の中の科学・技術を考える—』(培風館, 1997 年) p.107。